

陶磁

加藤直樹

KATO Naoki



《nwf1903》

高15.0 幅28.0 奥行31.0cm 2019年

素材／磁土

技法／紙に泥しょうを塗って焼成、タタラ作り

撮影／戸倉弘一朗



《nwf1903》

高13.5 幅38.0 奥行38.0cm 2019年

素材／磁土

技法／紙に泥しょうを塗って焼成、タタラ作り

例えば、森で出会う粘菌（アミーバ状細胞で胞子によって繁殖。動物でも植物でもない）の美しさとか、冬の始まりに見る薄氷やくもの巢の上に朝露が光っていたり、という日々の中で垣間見えるきれいなもののへの尊敬が始めにあります。

それに加えて、薄磁表現の可能性を手探りで進めながら、（失敗も含めて）面白がっている結果の一つがこの《ネイチャーワークス（Ⅲ）》シリーズです。

その中でも《nwf1903》（ネイチャーワークス・フラワー）は太陽に透ける芙蓉の花びらの美しさを表現したくて作り始めました。花びらの先が空中に消えていきそうなほど、薄くか細いのがその特徴です。



1979年岡山県生まれ。2002年岡山大学教育学部卒業。06年サンコア（岡山・玉野）にて個展、以降隔年開催。15年粘菌友の会立ち上げ。17年京畿世界陶磁ビエンナーレ銅賞。20年台湾国際陶磁ビエンナーレ金賞。21年7月アーティストインレジデンス（台湾・新北市立鶯歌陶瓷博物館）、11月6日〜14日工房イコ（岡山・倉敷）にて「趙原材・加藤直樹2人展」を予定。